は出來得る限りの手段を取りぬ。もとより天皇に叛くの意なし。唯將軍たらむと欲す。我行路を遮へぎるものは、我理想の爲めに之を排せざるを得ず。護良親王を殺さむとす、之を讒せざるを得ざる也、義貞は强敵也、之を除かざるを得ず。千苦萬艱の間に從容として驚かず、騷がず、弟と戰ひ、子と戰ひ、親臣と戰ひ、あらゆるものと戰ひ、五十年を及の下に過し、一生苦んで悔ゐず。野心燃ゆるが如くなれども、生死の間に自若として微笑す。古來尊氏ほど苦しみたる人なし。而して苦しき中に在りて落着きすましたる尊氏の如きは、他に其比を見ず。何ぞ其意志の鞏固にして、其襟度の瀟洒なるや。尊氏の一面は、雅懷の高士也。他の一面は絶代の政治家也。之をして賴朝の時にあらしめば、賴朝の人望は地に落ちしならむ。之をして家康の時にあらしめば、到底家康の頭はあがらざりしならむ。尊氏は或點に於て日本歴史上第一流の偉人也、其爲し、所、賴朝、信長、秀吉、家康なぞ、さまでの大差なし。たゞ偉材を抱いて、不幸なる時世に生れしのみ。

尊氏將軍となり、賴朝と同じ地位に立ち、鎌倉の遺制をとりて、建武式目をつくり、天下に號令するに至りて、尊氏の志成れると共に、尊氏たる所以の事業は終れり。これより後、癰を病んで死するまで、十數年間は、尊氏もはや精神的に死亡せる也。人或は其一生苦んで、浮生の榮華を味はふ能はざりしを笑ふ。されどこれ酒中の趣を解せざる下戸の輩が上戸の飲みすごしてへど吐くを笑ふに類せずや。尊氏は唯理想あるを知るのみ。理想に至る徑路の苦樂如何は、つゆ之を感せざる也。弟來れ、共に鬪はむ。子來れ、共に鬪はむ。天下皆擧つて來れ、我五尺の體にのし付けて進上せむまで也。尊氏の眼中には、財寶なき也、死なき也、また人なき也。こゝろんでも、つまづきて、唯我理想を貫かむとす。義貞に敗られて桂川に自殺せむとしたりき。直義に逼まられて自殺せむとしたりき。直義の黨類騷ぎ立てし時にて吟嘯自若たりき。何ぞ其宏量大度なるや。

尊氏、多少の學あり、禪を學び、殊に繪畫は、宅圓榮賀を師として造詣深く、好んで地藏を描き、其技專門の畫師に劣らざりき。これ尊氏が雅懷の一方に發展せるもの也。

尊氏曾て直義、師直に謂つて曰く、『源賴朝は信賞必罰して、人心を畏服せしめたりき。然れども刑を用ゆる苛刻にして、猜疑多く、殺戮度に過ぎ、骨肉も亦横死するを免れざりしは惜むべし。我は則ち然らず』と。概して日本人は器局小也。宏量大度將に將たるの器を備へ、漢の高祖に比して毫も遜色なきものは、それ唯足利尊氏乎。梅松論は、當年の名僧夢窓國師が尊氏を贊美せし言を傳へぬ。

或時、夢窓國師談議の次に、兩將の御德を條々褒美申されけるに、先づ將軍の御事を仰せられけるは、國王大臣、人の首領と生るゝは過去の善根の力ある間、一世の事に非ず。ことに將軍は君を扶佐し、國の亂を治むる職なれば、おぼろげの事に非ず。異朝の事は傳聞ばかりなり。我朝の田村、利仁、賴光、保昌、異賊を退治すといへども、威勢國に及ばず、治承より以下、右幕下賴朝卿兼征夷大將軍の職、武家の政務を自專にして、賞罰私なしといへども、罰

のからき故に仁の闕る所々見ゆ。今の征夷大將軍尊氏は仁德を兼ね給へる上に尚大なる德あり。第一に御心强にして、合戰の間、身命を捨て給ふべきに臨む御事、度々に及ぶといへども、笑を含で怖畏の色なし。第二に、慈悲天性にして、人を惡み給ふ事を知り給はず。多く怨敵寛宥ある事、一子の如し。第三に、御心廣大にして、物惜の氣なし。金銀土石をも平均に思しめして、武具御馬以下の物を人々に下し給ひしに、財と人とを御覽じ合はざる事なく、御手に任せて取り給ひし也。八月朔日なぞに、諸人の進物ぞも數も知らず有りしかど、皆人に下し給ひし程に、夕に何有りとも見えずとぞ承りし。實三の御体、末代に有りがたき將軍也。

夢窓國師は尊氏兄弟の恩に浴したりしかど、謗言を吐くべき俗僧なりとも覺えず。この評、尊氏が知己の言と云ふべし。

直義、尊氏と不和也。作りて南朝に降る。親房曰く、『直義降らば、尊氏自から平らがむ』と。迂なる哉。直義果して南朝にそむく。親房之を責む。直義曰く、『今の世武門政治にあらずんば治まらず。請ふ武門政治を托されよ』と。楠正儀は其言を然りとしたれども、親房なほ頑として悟らざりき。悟るも、例の公卿根性、依然として武士をいやしみたりし也。

直義、師直は、尊氏が兩腕也。直義や、師直や、智あり、略あり。されど、これ帷幄の謀臣にして、天下を御する德あるに非ず。到底尊氏を戴かざるを得ざる也。尊氏器宇弘裕、規略遠大、術數を弄して陰險ならず、人に任して疑はず、迂なるが如くにして實は敏、拙なるが如くにして實は巧、人をして端倪する能はざらしむ。之を當時に求めて、其比を見ず。爾來數百年、西鄕隆盛の如きは、やゝ之に近きもの乎。尊氏をして維新の際にあらしめば、隆盛となりしならむ。英雄といへども、時勢の兒のみ。誤解する莫れ、余は尊氏の叛逆を辯護するものに非ず。唯政治家として其人物の大なるを取る也。今の外交場裡、尊氏の如き人物を要す。而して何ぞ小策士、小政治家のみく多して、人物蕭條たるや。

中央亞細亞紀行

陸軍少將 福島安正閲
犀東國府種德記

緒言

亞細亞大陸の中央、葱嶺山脈の南に走り、喀剌崑崙と彙集して、巴密爾の高原をなし、西に斜面を開いて、西北に阿模阿河を走らし、布哈爾、撒馬爾罕、霍闐土の廣原を形成し、西南に興都克斯の山脈を西走せしめ、喀布爾より西希拉的に至れる、阿富汗斯坦の山地は、更に西して波斯の國疆をなし、北に裏海を湛え、南に波斯灣を灣入し、更に西、亞細亞土耳古なるユフラテス、チグリスの流域、イラク、アラビーを經て、阿拉比亞に連り、北は裏海の西に、高加索の山地を起し、露西亞の境、黑海の濱に、地頸をな

す。是れ我福島將軍が、明治二十九年を以て、其第二回の單騎旅行を試みし地也。

予嘗て蒙古大帝、成吉思汗の戰地を踪跡し、其最も主要なる戰爭の、多く巴密爾以西、土耳其斯坦、亞富汗斯坦、波斯及高加索地方に在りゝ延びて露西亞、勃爾喀利、ポヘシアに進擊せしを知る。今將軍の遊歷せし諸地を閲するに、多く當年成吉思汗及其子孫、並びに佔木兒の角逐馳驟せし所なるを見、今古俯仰の間、聊か無量の感なきを得ず。若し夫れ、親しく馬を裏海の一方に立て、當年龍戰虎鬪の地を踏みし、我福島將軍の、當時如何の感ありしやは、固より問ふを要せざる所とせん。

然れども、將軍の平生、期圖せし所は、固より亞細亞大陸の山川を跋渉するのみに非らずして、其素志の在る所、尚ほ東歐羅巴、北亞非利加をも遍歷せんとせし也。其東歐より、西比利亞を横斷せしは、既に天下の洽ねく知る所にして、兒童走卒と雖ども、亦其雄圖を稱せざるなし。唯夫れ、將軍が更に新に、單騎旅行をば、南亞細亞、中央亞細亞、西亞細亞及北亞非利加に試みしに至ては、其紀行尚ほ未だ世に公にせられざるが爲め、人得て其委曲を知る者なし。特に其中央亞細亞、西亞細亞に於ける旅行の如きは、邦人の容易に企て得ざる所たるが故に、今其手記せられし所に基き、茲に其紀行を編述し、遍ねく之を天下に知るあらしめんと期す。

蓋し將軍が、該旅行の志を抱きしは、固より既に、其西比利亞を横斷せられし時以前に之れありしが如し。將軍の言に曰く、『西比利亞單騎遠征の報告完成するを待ち、再び請ふて程を起し、南亞、東歐、北非、多年目的の地方を跋渉せんと欲し紀行の筆記、漸く其歩を進むるに際し、二十七年、朝鮮東學黨の亂あり、同年六月、命を奉じて京城に赴き、尋で日清兩國の破裂となり、牙山、平壤、虎山より、遼東に轉戰し、二十八年、馬關條約成るに及び、急に命ありて、京都大本營に歸り、更に樺山大將の先發として、臺灣に赴き、基隆、淡水の軍政を整理し、同年七月七日、東京に歸り、直に請ふて命を受け、十月五日東京を發し、埃及、拏比亞、土耳其、緬甸、印度、亞富汗斯坦、波斯、高喀索、中央亞細亞、亞剌比亞、暹羅、安南、東京等の各地を遊歷して、三十年三月二十五日歸京するを得たり。此行、水陸四萬三千五百三十一哩に亘りて、明治二十一年、大陸旅行の計畫熟してより、此に十年、始めて目的を達するを得たり。今より記する所の中亞紀行なる者は、即ち此旅行の一部分にして、二十九年五月十七日、孟買より程を起し、同年十二月三日、孟買に歸るに終る。記事多く波斯に關するは、其地を往還せしが爲め也』と。是れ以て將軍該旅行の素志、既に二十一年の當初に胚胎し、夙に西比利亞旅行と連續して、其雄圖を實行せんとし、國事の爲めに、姑らく其意を果さず、遂に二十九年を以て、其平生の期圖を完うするを得しを觀る可し。若し夫れ、少將遊歷の踪跡に至ては、旅程全線圖を寫眞版に附し、便宜の爲め、之を本誌の卷頭に掲げ、又亞歐跋渉略表をも、本號該紀事の末に附したり。讀者就いて參照して可也。

人或は、該紀行の、一も軍事上に關する觀察を載せざるを以て、將軍遊歷の目的を疑ふなしとも限られず、將軍の述べる所、其戰略戰術上の觀察に關する者の如きは、固より得て聞き得べき所に非らざるが故に、言の一も之に及ばざると怪むと勿かれ。篇中往々、感歎の辭を見るは、是れ記者の興來つて覺えず、其評言を敢てしたる者、是れは將軍の所述に於て、相關せざる者也。文字の妥當を缺き、若くは讀者の便を計り、時に圈點を施す如きは、皆記者の責にして、又將軍の與かり知らざる所也。篇中又『予』といふは、將軍に代つて言ふ所、檀越の罪は、犀東識す。將軍に對して、深く謝せんと欲する所也。

其一　印度

喀拉支滞在

明治二十九年五月二日、印度の喀拉支に在り。將に波斯に赴かんとす。此夜旅團將官ジェフェリー氏の官邸に導かれて、夜食を喫し、談話の際、最も驚きし一事件あり、曰く『昨日波斯國德黑蘭府に於て、波斯皇帝、回教堂に臨幸の際、兇徒あり、拳銃を發して、皇帝を狙擊し、皇帝は胸を擊たれて、間もなく崩せられたり、今日の模樣にては、國内平穩なり、云々』と。是に於て、波斯の旅行に關し、前途種々の障碍に遭遇することを豫期せり。此夜は、久しぶりにて、清冷の海風に吹かれ、樓上室外の緣側に寐臺を設けて、熟睡せり。」

翌三日は、恰も日曜日にして、輜重の巡覽を爲すこと能はず。午後將官と共に、海岸に馬車を驅て、風光を賞し、又此地信德倶樂部より、名譽會員たるの案内を受けたるを以て、答禮として赴き、名刺を殘して歸れり。

喀拉支は、平坦の一灣と、二島嶼とによりて成れる海口にして、次第に繁盛に赴くの地たり。又亞富汗斯坦の南路に對するの地位に居るを以て、防禦甚た嚴なり。港内頗る廣濶なりと雖ども、海底淺くして、埠頭に接近することを得ず、氣船は皆な、港口砲臺の下に碇泊するを常とす。聞く『數年前までは、荒蕪の沙地にして、青色なかりしが、水道の便を通じてより以來、頗る甜水に富み、樹木花草、繁茂するに至れり』と。今は緣蔭街路を掩ひ、家々の庭園草木欝生せり。日々暑氣の最も甚しきは、拂曉より日出の頃とす。是れ此時、風落ち波收まるによれり。太陽次第に昇り、内地の炎威猛烈なるに隨ひ、南風漸く强く、日中却て爽涼を感じぬ。

四日、午前七時、將官の誘導にて、輜重廠に至り、歸路、動物園を一覽し、午餐後、馬車を驅て、英領印度氣船會社の支店に至り、明日乘船の準備を爲し、日沒、將官に誘はれて、市街清涼の地を遊乘せり。

孟買到着

五日、午後二時三十分、波斯灣岸、及び孟買間、定期航海の氣船幾爾瓦號に搭入し、同四時三十分解纜せり。風浪甚だ惡し。六日、終日亞拉比亞海を航して、一物を見ず。七日、朝來左舷に、印度の大陸を望み、午後六時、孟買に投錨せり。直に端艇を雇ひて上陸し、大西亭に投宿せり。孟買

既に酷熱の時期に達せしと雖ども、常に冷快の海風あり、印度の北方、熱氣物を燒くに比すれば、非常に凌き易きを覺ゐぬ。

滯在十日

八日、朝食後、直に領事山田成德氏を、寺門町（ヂャーチストリート）の我領事館に訪ひ、數十通の書翰に接して、今一月以來に於ける、本邦の情況を詳らかにし、新たに勇氣の幾倍し來るを覺へたり。此夜、領事及び書記生を大西亭に招けり。

九日、英國軍艦、レットブレスト號の艦長來り訪へり。艦長スチュワルト氏は、昨年臺灣請取りの際、淡水港にありし人にて、屢々面會せしことありき。互に奇遇を喜び、午後同車して市中を覽せり。此日また、波斯旅行の準備に着手しぬ。

十日、山田領事の好意により、孟買市端、マラバル山の官邸に移れり。頗る靜閑にして、大に調査の便利を得、準備旁々、亞歐日記の記載に從事せり。此日、在孟買の本邦人十數名、官邸に會して、食事を爲しぬ。中に正金銀行の巡回員戸次氏、及び露國行の途にある、東本願寺より派遣の一行ありき。此日また山田領事と在孟買の波斯總領事を訪問せり。往年伯林駐在中、一等書記官として、同府にありし相識の人なりし、ミルザ、ハッサン汗と曰へり。

十二日、此夜、山田領事、在孟買の墺國總領事フヨン、ヒルシュ氏及びモーリス氏を晩餐に招ぐ。是れ予の爲めに便利を計るが爲めなりき。

十三日、此夜、山田領事、又波斯總領事を晩餐に招ぎぬ。

是れ又予の爲めなりし也。

十四日、此日、波斯總領事より左の添書を送り來れり。其一は、布西爾港外交事務官ミルザ、アーメッド汗宛、其二は、西拉斯總督コクチッド、ドレー親王殿下宛、其三は、德黑蘭外務省モジレルモルク氏宛、其四は、同サヂゴルモルク（總領事の父）氏宛なりき。

十五日、此日、墺國總領事より、在德黑蘭の同國公使に宛て、予が爲めに、非常に叮嚀懇切なる添書を送り來れり。波斯の陸軍には、尚ほ若干の墺國將校あるを以て、大に便利を得ることを確信せり。此に於て、旅行準備全く成りぬ。當時特別に用意せし物左の如し。

一、薄毛布襦袢　二枚
二、同袴下　二枚
三、シャツ鈕子　二個
四、軍用水筒　一個
五、水呑　一個
六、水漉し　一個
七、携帶炊事具　一組
八、携帶小鞄　一個
九、光線防ケ眼鏡　一雙
十、石鹼　一個
十一、馬鞍　一式
十二、鞍用石鹼　一個
十三、脚絆　一組
十四、ヨードホルム　一小瓶
十五、腹帶　一本
十六、薄荷　一瓶
十七、錠　二個

十八、陰嚢釣り　一本

十六日、孟買衞戍司令將官代理、大佐クレー氏を訪問し、再び孟買に來りし際、陸軍に關する輜重、其他の一覽を爲すことを約せり。次に、英領印度汽船會社に赴き、乘船切符を購ひ、乘船の手續を定めり。孟買より不西爾に至る船賃は、上等百八十ルピー、中等九十ルピー、下等十ルピー、なりき。但し下等は自欣とす。此夜、山田領事より、日本料理の饗應を受けり。故國の美味、數月忘れ難かりき。

孟買解纜

五月十七日、午前六時三十分、我領事の官舍、馬拉巴爾山を出で、維多里船渠の埠頭に往て、艇舟を雇ひ、八時喀拉支行の郵船德瓦爾喀號に搭入せり。領事山田成德氏等、送て埠頭に至り、横濱正金銀行の戸次田島等の諸氏、送て甲板に來る。此日、港內碇泊する所、英國軍艦七隻、水雷艇五隻の外、印度海軍の運送船一隻、及び英領印度汽船會社の汽船數隻を見ぬ。聞く、其五隻は、斯亞幾摩に向け、混成旅團を運送するため、政府の雇用する所なりと。

孟買水中、三小島あり、一は港口に位し、二は港內にあり、皆な要塞を築けり。

午前十時頃、比阿會社の英國郵便、ガンゼス號入港し、直に喀拉支行の郵便物を、我船に移せり。我德瓦爾喀號は、因て十一時を以て解纜し、亞拉比亞海に入りぬ。該船は、政府との條約を以て、一時間十三海里の速力を有すべき者たり。既に印度內地の暑氣酷烈なるあり、又西南季風の切迫するもあり、爲めに上等船客は頗る僅少にして、男女小兒を合して僅かに七人のみなりし。

西南季風は、每年大約六月中旬に始り、九月下旬に終るを當とす。此年は、都ての時節早かりしが爲め、季風の破裂も、例年に比すれば、大に早うして、此時既に其兆候あり濃雲屢々太陽を掩ふて、天色慘憺、西南の風强く起り、高く波濤を揚げ、船体の動搖甚しく、此日及び翌十八日は、艙內に横臥して、麵包二片の外、終日一物を食せず、屢々嘔吐を催ふして、甚だ憫れむべき有樣なりき。聞く西南季風の間は、沿岸梯航の汽船、全く往復を絶ち、孟買、喀拉支間定期船の如きも、激浪甲板を洗ふて、動搖甚しく、舟子の最も不愉快を覺ゆる時期なりといへり。

十九日、午前五時三十分、汽船砲壘の下を施回して、喀拉支港に投錨せり。近く相對して、碇泊するを、波斯行の汽船幾爾瓦號（五月十四日孟買を解纜せしもの）とす。一碗の珈琲に、船暈を醒まし、小舟を命じて、直に轉乘せり。船は前日喀拉支より孟買に至りし者にして、船長給仕、都て舊識なりし爲め、百事大に便利を得たり。

摩斯喀特投錨

德瓦爾喀號より、波斯行の郵便物を持ち來るや、幾爾瓦號は、直に解纜して、午前七時三十分、喀拉支港を出で、右舷に巴爾支斯丹の山脈を望み、波濤を破て、西の方亞拉比亞の阿曼國、摩斯喀特港に向へり。純然たる上等船客は、單に予一人のみにて、其他は印度人の上等船客なりき。彼等は上等

室を領し、上等甲板を逍遙するの權利を有すと雖ども、食卓に就かず、皆な自炊をなせり。船賃の如きは、非常の低廉なるが如し。

此頃、佛國郵船會社、孟買より喀拉支、及び摩斯喀特を經て、直に波斯の不西爾に至る一支線を開けり。該波斯線路は從來英領印度汽船會社の專有に屬し、得々として他を顧みず、速力鈍き小形の汽船を用ひ來りしが、突然此侵入に逢ふて、一時甚しく狼狽をなし、急に土人に對する船賃を低減し、孟買より喀拉支を經て、波斯灣頭の布蘇拉に達する長航海の、下等一人を、僅に七ルピーと爲し、又該線路來往の商人には、特別低價を以て、上等切符を賣渡すことと爲せり。佛國汽船は、噸數甚だ大にして、速力に富み、待遇も亦叮嚀なり。兩者互に競爭に力め居れり。

同乘の印度紳商等は、上等室を占領すとは言ふものゝ、皆な跣足にして、土間に平坐し、手鼻をかみ、清潔の語を知らざる徒輩なるを以て、彼等の常とする所も、予等より之を見れば、凡べて亂暴狼籍の觀ならぬはなかりき。彼等は跣足にして、甲板の上下を奔走し、勝手次第に平坐横臥し、衣服を以て、清潔なる寢具を汚し、上等室内の寢具、枕等を甲板上に持ち來り、晝夜の別なく、轉げ廻り、食時に至れば、從者ある豪商等は、之をして料理せしめたる、ライスカレー、燒魚等を、大なる鉢に盛りて、中央に置き、親子兄弟其周圍を繞りて平坐し、右手の指三本を以て、或は食ひ或は甜り、或は壺中の冷水を呑み廻し、又從者なきは、此處彼處に、三々五々相集りて、或は果物を食ひ、或はカレーを掴む等、眼のあたり餓鬼出界を見るの想ありき。

此日、船暈又起り、且つ艙内酷熱なるを以て、甲板に出でゝ、明り窓の上に、寢具を廣げて横臥せしが、其左隣に來りし者は、前記中の一紳商にして、彼は妻と、長男夫婦と、二男の五人連なりしが、翌朝彼れ船長に訴へて曰く、『昨夜人われ、我妻の枕邊に近寄りたり』と船長一喝して曰く、『余の預り知る所にあらず、今夕は艙内に在て、妻と同衾し、自ら他人の襲撃を防禦すべし』と彼れ一言なくして去り、此夜は予の左隣に來らざりし。

彼等乘客中又船賃の低廉を奇貨とし、長航海の切符を買ひ、途中に下船して、其切符を非常の高價と詐り、田舍漢を欺いて、之を賣付る等、往々にして之ありといへり。又下等切符を買ひ、混雜に乘じて、夜間竊に上等甲板に來り眠る者もあり、船中の風紀を維持せんとする、船長の苦心、察するに餘りあり。

廿日、終日一物を見ず、午後に至りて、風衰へ雲散じ、波濤漸く收り、食慾從て起りぬ。此夜、天色清涼、汽船漸く進で、阿曼灣に入るを知れり。

廿一日、朝來、左舷雲煙の間、半螺の起伏を望めり。即ち阿曼國の沿岸に連なる、弗拉山脈となす。此日、天氣清朗、汽船の前進するに從ひ、亞拉比亞の新地形、波を破て踴出し、帆船二三、更に一層の風光を添へ、午後二時三十分、摩斯喀特港に投錨せり。喀拉支を距ること、大約四百八十海里となす。

摩斯喀特港

峩々たる黑色岩石の峻嶺、西南二面に連り、同地質の一小島、東方に位置し、中間に一小灣を作る。是れを摩斯喀特港となす。港口北に開け、北風を遮るものなし。港内碇泊する所の船舶、英國軍艦ボイス號、阿曼國軍艦一隻、同國帆走船五隻、及び英領印度汽船會社の一汽船、波斯灣内より來りしもの之れあり。港内既に餘地を存せざりき。因て我汽船は、港口に投錨せり。港灣の盡る所、白壁の二層樓あり、阿曼國支丹の宮殿となす。其東に位置し、宮殿を凌ぐに足るべき層樓あり。米、佛、英の領事館是れ也。市街は其後方にあり、甲板より望む可らず。英領事館の後方に聳ゆる巖山の上、及び宮殿の西方に屹立せる峻峰の上に、煉瓦を疊て築ける舊式の要塞あり。之を左右の固めと爲し、其他東西南三面の山上、處々に分派堡、或は望樓を築き、數十門の大砲を備へり。堡壘崩壞するも、修繕を加へず、又砲門の頗る亂雜不整頓なるを見ぬ。軍艦は大約百噸許にして、外面の黑色、既に班々剝て之を塗らず、内部の形勢又察知するに足る。聞く、政府に屬する汽船五隻あり、一は孟買間を往復し、二は今亞弗利加の桑日巴爾にありと。此國の旗章は、眞紅にして、恰も我昔時の平氏の旗幟と同じ。此地黑岩嶮峻なる絶壁の面に白粉を以て此に來泊せし、船艦の名を大書せるもの、甚だ多し。特に此地の一奇觀となす。

從明治二十八年
至同　三十年

亞歐跋涉略表

英里換算　陸軍步兵大佐福島安正

國名	地名	路		着	發	備考
日本	東京	水路	汽船			
同	神戸		川汽船			
同	長崎		小舟	三八五	三七六	
支那	上海		汽車	四七五		
英領香港			馬車	八三〇		
佛領西貢			騎馬	九一五		
英領新嘉坡		陸路		六三七		
同哥倫波				一五七〇		
同亞丁				二〇九五		
埃及蘇士				一三〇八		
同改少羅				一五〇		
同改羅				七		

十月六日	二十八年十月五日		
十月八日	十月七日		
十月十日	十月九日		
十月十五日	十月十二日	佛國郵船メルブルン號	
十月十九日	十月十六日		
十月廿二日	十月二十日		
十月廿八日	十月廿三日		
十月廿八日	十月廿八日		
十一月三日	十一月三日		
十一月八日	十一月九日		
十一月九日			